

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百八十一回 三澤貫一郎先生のこと その二

南出喜久治（令和7年7月1日記す）

元素の周期律表が綺麗なものではないので、綺麗な形の新たな周期律表を作れないか。そんなことを三澤先生と話したことがあつた。三澤先生も、過去にそんな試みをした人が居たが成功しなかつたといふ話を聞いた。しかし、周期律表を平面的に作るのではなく、立体的に作ればきれいなものになるのではないかと言つてみたら、三澤先生は、それを考へた人も居たと言はれたので、これ以上考ることは諦めて、
水兵 (H He) リーベ (Li Be) 僕の船 (B C N O F Ne)
とか、円周率の語呂合はせの方に興味を向いた。

三澤先生は、広島の師範学校を出て教師の道を進んでこられたが、戦後に一変した教育に對して忸怩たる思ひを感じてこられた。

私が、政治経済の授業で、左翼の教科担任の教師が日本国憲法の全文を暗記出来たら成績で「5」を付けると言つたことから、何人もの生徒が暗誦して社会科の教官室に行つたことを知つてゐたので、私も教官室に行つた。そして、暗誦できるか、と尋ねた中共の文化大革命を支持してゐるバカ教師の前で、私は、教育勅語を大声で唱へた。教官室の教師は全員が驚いてゐた。その中で、日本史の伊東先生がたまたま私の風呂屋のお客さんだつたらしく、父親と三澤先生にそのことを話した。

父親には、南出さん、あんたの息子は親に似て腹が座つてゐる、と言つて笑つたらしい。

三澤先生は、そのことを知つて、さらに私と親密にしていただいた。

私は家業を継ぐので大学には行かないし、行けない。そのことは、友人も教師も知つてゐる。私は数学には非常に興味があつて、趣味で大学の数学はマスターしてゐた。

そのために、私は、同級生に数学を教へてきた。京大法學部に行つて検事、裁判官を務めた上垣猛（大阪地裁で司忍の無罪判決を出した裁判長）や同じく京大の文学部に行つて韓国語の NHK の教師をした油谷幸利、それに最後は家業の豆腐屋を継いだ平野良明なども私の教へ子?であつたし、新任の若い数学教師も教へたことがある。

そのことを数学の教官の細井先生は知つてゐて、私を京大の数学科の助手に採用してもらふやうに配慮していただいた。

そのことを三澤先生に報告に行つた。

すると、三澤先生は、ありがたい話だけれど、南出君、それは辞めた方がよい、と言はれた。

そして、君には確かに数学の才能はある。しかし、学問の才能があることと学問で成功す

ることは違ふ。君は、学校の問題や政治の問題に強い関心があつて、激しい論争をしてゐる政治的人間だ。そんな人間が学問の道を進んでも、世間が騒がしくなれば学業に集中することができなくなつて、必ず途中で学問を捨てることになる。さうなることが見えてゐるので、むしろ、数学の道を捨てて政治の道に進むのがよい。

なるほど、そのとおりだと思つて、三澤先生の忠告を受けることにして、政治の道を歩むことに決めた。父親もそれを理解してくれてゐた。そして、民社党に入党したときも、それ以後の選挙運動のことなど、卒業してからも上京区の三澤先生の自宅に何度も訪問していろいろと報告し相談して、そのことは三澤先生が亡くなるまで続いた。

自宅訪問をしたことで記憶にあるものとして、三澤先生の奥さんから、お節料理の黒豆の煮豆の作り方を教へてもらつたことがある。そんな家族付き合ひをさせてもらつた。

三澤先生がなくなつた後、奥さんから相談があり、三澤先生の遺言で全財産を公益活動を行ふ公共団体に寄付されることになり、最後まで聖職としての教師の誇りを持つて人生を全ふされたことに深い感銘を受けた。